

大学を知り、学ぶ機会を設け 在学生の保護者を「ファン」に

女子栄養大学常任理事

染谷 忠彦

そめや・ただひこ

1965年東洋大学経済学部卒業。同大学に就職し、新学科の設置や教務諸制度の整備、入試改革等に携わった後、入試部長に就任。2003年女子栄養大学広報部長兼理事長付部長、2007年常任理事に就任。



の大学のファンになることによって、口コミで広報してくれることである。

大学を訪れたときに感じた良い雰囲気や、保護者会のイベントでの楽しい体験などは、わが子が大学で成長した、期待どおりの就職をした、といったこととは別に、大学に対するイメージを向上させる。その結果、大学の活動に進んで協力してくれるようになる。

本学のオープンキャンパスには、在学生の保護者が受験生の保護者の質問に答えるコーナーを設けている。大学の宣伝は一切お願いしていないが、ほとんどの保護者は、本学の良いと思う面を一生懸命伝えてくれる。わが子が通う大学という以上の愛着を感じているからにはほかならない。実際に通わせている者の言葉だけに、下手な広報よりも説得力がある。

保護者の横のつながりは私たちが考える以上に強い。一度でも良い印象を持つと、子どもが卒業した後もポジティブな口コミ情報はどんどん広がっていく。ある意味、理想的な広報のあり方と言える。将来は、寄附など経済的な支援をしてくれる可能性もある。

わが子と同じ学びを 体験する機会を提供

保護者の信頼を得て、ファンになってもらうために、どのような方法が考えられるだろうか。

ほぼ全ての保護者が出席する入学式は、教育方針を伝える絶好のチャンスだ。本学は、指導の厳しさを隠すこと

なく説明している。一日中勉強させるし、レポートもたくさん書かせる。言葉遣いも指導する。社会に出たらもっと厳しいことが待っているということを、保護者にしっかりと認識してもらう必要がある。

保護者が反発することはない。すべて子どものためだということがわかれば、大学の厳しい指導をむしろ喜ぶものだ。そして、子どもが勉強や学生生活について家族に弱音を吐くようなことがあっても、まずは大学側の視点に立って子どもを叱咤激励するようになる。

そして、本学を好きになってもらうために、学びの体験の機会を設けている。今の保護者は子どもがどんな環境で何を学んでいるのか、自分も体験してみたいと思っている。保護者会をつくった理由の一つが、こうした潜在的な欲求に応えることだった。

学生の授業や実習と同じ内容では難しいので、アレンジして実施している。料理セミナーに参加したり、卸売市場を見学したりと、学びの雰囲気を味わうだけでも、大学に対する満足度は高くなり、教育方針もより深く浸透

する。

家政系の大学だからこうした試みを実施しやすい面もあるが、他の学問分野でも、同様の機会があれば、参加する保護者は多いはずだ。

保護者会の活動を 大学が全面的に支援

保護者会への加入は任意だが、発足した2010年度以降に入学した1~3年生の保護者の96.9%に該当する1817人が会員となっている。会費は4年間で1万円で、約100人の保護者有志の役員が運営している。オープンキャンパスにおける受験生の保護者への対応や、学園祭での野菜の直売会の準備・販売などをする。役員の中でも中心的な役割を担う運営委員(約20人)は、イベントの企画立案を行う。

こうした保護者の積極的な参加を引き出すにあたって重要なのは、過度の負担を掛けないことだ。本学の場合、会計処理などの事務作業は、保護者会専任の担当職員がこなす。役員同士の交流や、大学に対する理解を深めてもらうことを目的として開く役員会も、

大学が積極的に支援する。また、会長を決めていないことも特徴だ。あくまで役員の自主性に任せ、できるときにできる人が活動する。

今後は同窓会と保護者会の交流を進めたいと考えている。本学の卒業生には社会の第一線で働いている人が多く、地方には、地元の食品・栄養業界に精通し、幅広い人脈を持つ人が多い。そこで、地域ごとに同窓会と保護者会、県人会(出身都道府県ごとの学生組織)を同時に開催することを検討している。保護者にとっては、その地域での就職状況について子どもと一緒に生の情報を得られるメリットがある。また、卒業生の保護者を組織化し、関係を継続していく考えもある。

大学は積極的に保護者に働き掛けていくべきだ。保護者会をつくるのが難しければ、保護者向けのイベントを開催したり、悩みや相談を受け付ける窓口や部署を設けたりするのも一案だろう。大学に対する理解を促し、ファンになって応援してもらう。そして、卒業後もその関係を継続していけば、卒業生に匹敵する貴重な人的資産になるに違いない。(談)

教育に対する信頼が 「一緒に育てる」姿勢に

大多数のケースで、学費や下宿代を払う保護者は、進学先の決定に大きな影響力を持っている。受験生の保護者の不安や疑問に応え、大学に対する信頼を高めることが募集戦略において不可欠であるという認識は、すでに一般的になったと言ってよいだろう。

では、入学した後はその保護者を放っておいていいのかというと、決してそうではない。コミュニケーションをさらに深め、関係を継続・強化することが重要である。本学は、2010年に在学生の保護者会を組織した。保護者会は、懇親会や講演会、料理セミナーなどのイベントを多数主催して、大学との信頼関係づくりに努めている。

なぜ、大学は保護者とコミュニケーションを緊密にするべきなのだろうか。一つは、自学の教育方針を理解、信

頼してもらうためである。少子化という状況も手伝って、今の子どもは保護者との距離が近く、大学生になっても精神的にすぐに自立できるわけではない。大学に入学するまで厳しく指導された経験が少なく、教員から少し注意されただけでショックを受けることもある。保護者が大学の教育内容を知らず、信頼がない状態だと、そうした指導をわが子に対するバッシングと受け止め、大学にクレームをつけるようになる。最悪の場合は退学することにもなりかねない。

そうしたことを防ぐには、教育方針に対する賛同を得て、「大学と一緒に子どもを育てていく」という姿勢を持ってもらうことが大切だ。

ファン化した保護者が 口コミで魅力を広める

保護者とのコミュニケーションのもう一つのメリットは、接触を重ね、そ

在学生と受験生それぞれの保護者の声

2012年9月に開催されたオープンキャンパスで、受験生の保護者と、その相談に応じた在学生の保護者の声を聞いた。

保護者会の役員を務める母親は、「保護者同士の交流など、活動は負担になるどころか楽しくて仕方がない」と話す。「子どもを見てわかること、保護者会主催の料理セミナーへの参加経験などをもとに、大学の良さを伝えたい。受験生の保護者が何

を不安に思っているかはわかるので、力になりたい」という。

受験生の保護者からは、「知りたかったと思っていたことを気兼ねなく聞くことができた」「学費が高いことがネックになっていたが、実際に通わせている方の話を聞いて、それだけの価値がある教育をしているとわかった」といった声が聞かれた。

保護者会事務局の杉山成二課長は、「私たちも気づいていなかった

“保護者目線”による大学の魅力について、兄弟姉妹が通う他の大学と比較しながら、リアルな声として伝えてくれる保護者も多い」と語る。



オープンキャンパスでの個別相談会。